

短

歌

常住の月

田川 恵良

長へにみどり色ま壽七面山照す實相常住の月
 しら妙の身延山根の法の池に蓮子の花の咲くぞめでたし
 みどりなす房州小湊浦邊にも御法の華の咲くぞうれしき
 妙なるや房州小湊浦曲にも御法の華の咲きにほふかな
 深みどり千代の榮を延山にかざり初めぬ實相の月
 西谷の遠つみ祖師の墓どころ古りし石碑は苔むしにけり
 眼を閉ぢて額き居ればありく祖師のみ姿浮びきますも
 眼を閉ぢて祖師を念へばあな尊と菩薩の像の浮び来るなり
 美しくし掃きしみ寺の廣き庭に櫻の花は散りやますけり

文 藝 欄



作品集

越後への旅

原田 見正

八月二十日朝九時上野驛發新潟行の急行列車に乗った、二人の出征軍人を見送るべくホームは大變なさわぎであつた。
 私にとつて東京より北へは始ての旅である越後への旅は私には未知の世界への旅であり又あこがれの旅であつた。

東京を後にして荒川の鐵橋を渡ると川口である、窓外に見る家々には鑄物工場が多かつた、私には今日迄心に描いたなつかしい町である、今初めて見るこの町が特別のなつかしみを感ずるわけは私のたつた一人の兄が居るといふ事である。小學校を卒へると兄は數年前商人を志望してこの町の矢崎といふ大きな鑄物問屋に奉公に行つた、それは叔父がこの店の番頭をやつてゐるといふ關係もあつた、兄がそこへ勤めて十何年